ゆれる国際貿易体制

《ガットはどこへ行く》

外務省ガット～中国担当
小倉和夫著

ゆれる国際貿易体制

——ガットはどこへ行く

小倉和夫著

サイマル出版会

SIMUL

ゆれる国際貿易体制　　小倉和夫著

©Kazuo Ogura
The Simul Press, Inc. 無断転載を禁ず

（発行所）　株式会社　サイマル出版会

発行人／村松増美　　編集人／田村勝夫
東京都港区赤坂1-11-45興和第3ビル（〒107）
電話(03)582-4221（代）／振替・東京52090番
印刷・製本　凸版印刷株式会社

1972年　Printed in Japan <0333－030132－2703>

国際貿易の明日を考えて（まえがき）

ダンピング、ＮＴＢ、クローリングペッグ、ガット、ＩＭＦ――国際経済に関するこうした横文字が、さしたるためらいもなく新聞紙上を賑わすようになったことは、日本経済の国際化を象徴する現象として、あながち眉をひそめてばかりはいられない。

ところがおよそ横文字風の言葉は、さけの燻製をスモークトサーモンと言いかえただけで何か高級なイメージを与えるように、一種独特の魔力を持っている。しかもこうした魔力のせいもあって、実態がよくわからないままに横文字が使われ、いい加減な使い方に堕している場合も少なくない。ひどい場合になると、人によってその意味をまったく違ったものととらえているため、話がこんがらかってしまうこともまれではない。

アフリカはセネガルの首都、ダカールの澄みきった海辺の一端に、大きなヨットをあしらったフランス料理の店があるが、そのメニューにコー・エキジスタンス（平和共存）と名付けられたコクテルがあった。聞き慣れぬ名前のコクテルだと思ってどんなものか聞いてみると、コカコーラとウオツカを混ぜたものだという。なるほど米ソの平和共存かとおもしろく思ったが、この話を、ヨハネスブルクからナイロビへ行く飛行機のなかで隣に坐った南アフリカ共和国の婦人にしたところ、難しい顔をして、白いウオツカと黒いコカコー

ラなら、白人と黒人の平和共存という意味でしょうかとたずねられ、困惑したことがあった。聞き慣れぬ言葉は、とかくとんでもない連想や誤解を生むことを示すものである。

横文字にまつわるこのような誤解や魔力、あるいは使い方のいい加減さは、第二次大戦後の自由主義諸国間の貿易を律してきた「ガット体制」、あるいは通貨面の秩序の問題をも含めた場合に用いられる「ブレトン・ウッズ体制」といった言葉にも見られるところである。事実ガットという言葉はよく聞かれるけれども、ガットが国際条約なのか国際機関なのか案外明確に理解されないまま使われていることが多いし、またその内容についても、自由貿易を守れという国際的約束くらいに思われている場合が少なくない。

実はガットとは、一言でいえば、自由貿易制度を守るための国際的約束であるとともに、国際貿易の姿を一歩でも理想のかたちに近づけるための国際的活動の場を意味する。いいかえれば、第二次世界大戦後の自由主義諸国間の貿易を、国際的制度の面から支えてきた中心に他ならない。戦後の世界貿易がほぼ順調に拡大してきた背景には、主要工業国のめざましい経済成長とか米国の膨大な対外援助といった経済の実態面の成功のほか、ガットを中心とした国際貿易の枠組とルールが有効に機能してきたからであることを忘れてはならないところであるが、こうした国際貿易の制度的・規範的基礎を提供したものこそガット体制であったといってよいであろう。

ところが、このような重要な機能を果たしてきたガット体制について包括的な知識を得ようとしてみると、存外参考になる書物は少ない。ガットの各条文の解説やガットとは何かについての平易な解説書は二、三あるが、戦後の自由貿易体制を支えてきた基本的考え

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

方や、またそうした体制を生んだ政治的・外交的背景、さらには一度生まれた制度が、その後の世界経済の変化に際してどのような問題に直面し、またそうした問題は国際的にどう処理されてきたかなどについては、比較的まとまった本は出ていないようである。

＊

私は、一九六七年末から七一年の半ばまで四年近くにわたってガットの活動に直接間接に参画し、国際貿易のあり方や、日本経済と世界経済の接点の問題について真剣に思いを致す機会に恵まれたが、その間痛切に感じたことの一つは、世界貿易のパターンを決定しているものは単に各国経済の実態ばかりではなく、国際的貿易制度あるいはルールであるということであった。ここで制度あるいはルールというのは、単に一つの国際条約や国際機関を意味するのではなく、世界貿易を支えてきた理念、そしてその理念を現実にうつしかえるためになされてきた努力とその成果、さらにはそうした成果を監視しコントロールしてきた国際体制を意味する。

拡大欧州共同体の成立、米ソ貿易協定の成立、日中国交正常化など国際経済社会は今やより多角的より複雑なものになるきざしを示しているが、片やこの間にあって、わが国の経済力と世界貿易に与える影響力は日増しに増大し、今や日本経済のあり方は世界貿易のあり方をぬきにして論じられない時代となっている。私としては、こうした時代の流れを意識しつつ、この本を通じて、第二次大戦後の自由貿易体制の誕生と歴史、そしてそれが現在直面しているいくつかの問題を明らかにし、それによって、国際貿易制度のあり方に一つの視角を提供し、また、現実に起こっている多くの問題を考察する際に、一つの尺度

を設定したいと考えた次第である。そしてこのような視角や尺度の一つとして、ガットの思想と、ガットでとりあげられてきた国際貿易の数々の問題を解明しようとしたものである。

このような意図のもとに執筆したものだけに、本書では、ガットという国際規範の枠をこえて、世界の自由貿易のあり方を念頭におき、できる限り幅広く問題をとらえたつもりであるが、そのために、多国籍企業や公害問題のごとく、筆者の経験と能力をこえる問題にも言及する破目となり、専門家からみればきわめて不備な記述もあると思われ、月並みな言葉ながら、読者のご批判とご叱正を仰ぐしだいである。

最後に、本書がこのような形で上梓されるにいたったのは、出版を快諾されたサイマル出版会の田村勝夫編集長はじめ、同編集部の生田栄子、諏訪部大太郎、砂川肇氏のおかげであり、厚くお礼申し上げる。またサイマル・インターナショナル専務村松増美氏と渡辺官房長官秘書官のご好意にも併せ感謝したい。

（一九七二年一〇月）

小倉和夫

ゆれる国際貿易体制・目次

国際貿易の明日を考えて（まえがき）

ゆらぐガット体制（はじめに）

1　国際貿易の曲り角……二

2　自由の女神の悩み……四

第一章　日陰者から立役者へ
——ガット体制の誕生と成長

1　二度生まれたガット……一一

2　運命の偶然……一七

3　有機的成長の歴史……二〇

4　幽霊から人格へ……二九

5　世界を回る「ラウンド」……三三

第二章　問われる既存体制の理念
——国際貿易関係の基本原則

1　「MFN」の意味するもの……四五

2 輸入自由化と関税引下げ……五〇
3 フェア・プレーの原則……五七
4 相互主義の真意……六九
5 話し合いの精神……七四

第三章 裏切られた「自由貿易」
——理想をむしばむ主要貿易国
1 輸入制限にからむ内外の思惑……八六
2 バターかガットか……九六
3 対日差別の壁……一〇五
4 「市場攪乱」による貿易規制……一一三

第四章 ガット体制に吹く嵐
——四つの新しい潮流
1 南北問題の深刻化……一二五
2 地域主義の波紋……一四二
3 「東」の国々の接近……一六〇
4 国際収支問題の複雑化……一六四

第五章　しのびよる地割れ
——明日の自由貿易

1　多国籍企業の挑戦……一七五
2　午後三時の産業……一七六
3　公害問題と国際貿易……一八〇
岐路にたつガット（むすび）……一八五
〈付〉ガット規約（抜粋）……一八九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ゆらぐガット体制（はじめに）

世界の貿易秩序、あるいは国際的な貿易体制はいまや一つの曲り角にさしかかっている、という言葉が最近しばしば口にされる。

特にわが国では、アメリカが日本からの繊維品やテレビの輸入を制限する動きを示したり、あるいは、イギリスがＥＥＣ（ヨーロッパ経済共同体）に加わることに決定したなどのニュースにかこつけて、いまや国際貿易が一つの大きな転換期にさしかかっているとの声が聞かれる。

事実、日本に限らずアメリカやヨーロッパにおいても、国際的な貿易秩序が乱され、第二次大戦直前のような混乱と独善主義が再び頭をもたげるのではないかと心配する人びとも少なくない。とりわけ、かつて圧倒的強さを誇った米ドルの地位の凋落とそれに伴う「国際通貨不安」をまのあたりに見せつけられるにつれ、第二次大戦後通貨の安定と自由貿易の維持を国際的に保証しようとして設けられた体制――通常ガット・ＩＭＦ体制といわれる制度、機構について基本的な疑問がなげかけられている。

幸いにして今のところ、世界貿易、それもとりわけ先進国間の貿易は順調に伸びているため、現在の「体制」に対する危機感はそれほど深刻にはうけとられていないけれども、ちょうど、地平線上に拡がりつつある黒雲のように漠然とした懸念が、世界貿易の「明日」を考える人びとの心にしだいにしのびこみつつあることは否定できないで

あろう。

1　国際貿易の曲り角

このように、世界の多くの人びとが現在の自由貿易体制に不安と疑問を感じ出したのは、戦後二〇年以上にわたって世界経済に君臨し、自由な貿易（すなわち、輸入品に高い関税を課したり、外国産品の輸入の量を政府が人為的に制限したりせず、文字通り自由に貿易するという考え方）と無差別な国際通商（ある国を他の国から差別し、特定国からの輸入を特に優遇したりせず、平等に取り扱うとの考え方）を世界に広め、またこうした思想の実現に努めてきた米国の経済力と指導力が弱まったことが直接の原因となっているといえるかもしれない。また、こうした米国の「力の限界」とならんで、ヨーロッパ諸国や日本の経済力、政治力が高まり、世界経済、世界政治に、いわゆる多極化現象が進み、しかも他方において、このように力を蓄えたヨーロッパや日本は、あるいはヨーロッパ内部の問題に忙殺され、あるいは過去の立場や考え方にとらわれて、いまだ国際的に自由貿易の維持ないしその貫徹を図るため自らイニシアティブをとることができないでいるという事情も指摘されている。

加えて、近年国際的に約束され、各国が本来遵守してしかるべき貿易秩序ないしルールが、あまりにも頻々、また、あまりにも目立った形で侵され無視されてきたことに対する幻滅と反省が、将来を憂慮する声となって湧き出てきたこともあるであろう。たとえば、完全な国際ルール違反かどうかはさて置くとしても、食糧や他の農産物の国内価格をつり上げて生産を増大し、他方一定の価格以下の輸入品には高い税金をかけるという制度をヨーロッパ諸国が採用し、国際的非難にもかかわらず長年にわたってこれを維持してきたことは、自由貿易の理想と秩序に大きな風穴をあけたと見

る人びとも少なくない。

ヨーロッパに限らず米国も、繊維品の輸入制限や化学品に対する高率の関税など、激しい世界の批判の的となる措置を行なってきたのみならず、一九七一年八月には、多くの輸入品に課徴金をかけるという大きなルール違反を犯している。またわが国についてみても、電子計算機から皮靴にいたる工業製品、オレンジからこんにゃくにいたる農産物について、国際的な義務に反して輸入数量制限を実施している。

世界の主要な貿易国が、かくも堂々と国際ルール違反を行なっている現実の前に、また、こうしたルール違反がとりたてた制裁も伴わずにまかり通っている状態を前にして、心ある人びとが、国際貿易の「明日」を憂慮するとしても不思議ではない。

このような事態、すなわち、国際的な自由貿易秩序の混乱の徴候を見て、ではわが道を行くとばかりに、自国に都合のよい政策にしがみつくのも一つの考え方であろう。けれども、世界の主要国がすべてこのような思想に走ることを考えてみれば、それこそ暗黒の一九三〇年代の再来であり、かつ、特にわが国のように貿易立国を一つの国是としている国にとっては、自らの手で自らの首をしめることになりかねない。こう考えいたる時、今こそ、国際的な貿易秩序に対する反省と、その新しいあり方が真剣に問われなければならないことに気づくであろう。

世界の通商秩序と貿易体制が今曲り角にあり、今後の方向とあり方を真剣に考えなければならないとすれば、戦後の自由貿易体制がともかくも二〇余年間維持されてきた事実、そして「体制の危機」がここ数年の間に急速に高まってきたことからいって、最近の時代の変化や新しい現象ないし潮流が何であり、どのような変化が既存の体制を一つの曲り角に追いやったのかに目を向けるのは当然であろう。この観点から見れば、先にふれたような、米国の競争力の弱体化と指導力の欠如、

ヨーロッパにおける経済統合の進展、わが国の経済的台頭、さらには、いわゆる後進国の経済発展問題の深刻化と彼らの発言力の増大など、いってみれば既存の体制にふきすさぶ新しい風、新しい潮流に注目しなければならないであろう。

しかしながら、一つの建物がぐらつき出した時には、風や地震などの「外的」要因に気を配るだけではすまず、建物自身の構造と欠陥を改めて考え直さなければならないのと同様に、現在自由無差別の貿易制度が一つの曲り角にさしかかっているのであれば、既存の制度ないし構造をあらためて観察し、現在の体制が生まれてきた背景、その変化の歴史、さらには時代の推移に伴って出てきた色々な問題が今までどのように処理されてきたかをみきわめ、そこから現在の体制の矛盾をえぐり出し、同時に、世界貿易の現状と国際的規範の間にどのようなずれがあるかを見ることによって、国際貿易体制の「明日」を考える必要があるのではなかろうか。

2　自由の女神の悩み

自由貿易体制の曲り角とか、国際貿易秩序の危機とかいう言葉を使った場合、「自由貿易体制」ないし「国際貿易秩序」とは具体的に何を意味するのであろうか。

戦後の国際通商のルールないし体制を反省しその将来を論ずるのであれば、理の当然として、そもそも現在の世界貿易のルールないし秩序とは何であるかがまず問われなければならない。

では第二次大戦後の世界貿易を律してきたルールと枠組が何であったかといえば、やはりそれはガット（正式には「関税及び貿易に関する一般協定」General Agreement on Tariffs and Trade）であったといわざるを得ないであろう。なぜなら、今世界貿易の秩序と体制を問題にしているからには、それは世界の主要国に認められかつ受けいれられ

た国際的約束でなければならず、同時に、多くの国々が参画し国際的活動の行なわれる場であり機関でなくてはならないはずだからである。

事実、ガットこそ、俗にガット・IMF体制という言葉が使われるごとく、通貨の安定を目的としたIMF（国際通貨基金）と並んで、自由貿易の女神として、戦後の世界経済を規律する制度的柱となって大きな役割を果たしてきた。それというのも、ガットは、自由貿易の思想が具体的にはどういうふうに適用されなければならないかを定めた国際的合意ないし条約であり、また同時に、自由貿易を貫徹するために各国が話し合いによって種々の貿易障害を撤廃することを促進する一つの「交渉の舞台」であり、かつまた、各国が自由貿易の理念を実際に実行しているかどうかを監視する国際機関であるからである。

ところが、このような役割をになって、いわば「自由の女神」として登場したガットも、実は過去二〇余年、色々な「悩み」に遭遇しなければならなかった。そして、こうした自由の女神の悩みこそ、今日の自由貿易体制の危機を惹起したものに他ならないのである。

ガットという自由の女神の悩みが何であったかについては、すでに示唆したように、大きく分ければ三つあるといえよう。

第一は、ガットという制度および規範が、その誕生の経緯から、先天的欠陥を持っていたことであった。この点は、戦後の自由貿易体制の誕生と成長を記述した第一章に詳しく述べるところであるが、簡単にいえば、ガットは、本来は自由貿易体制の守り神といった巨大な役割と目的のためにできたものではなく、もっとささやかな、限られた目的のために、臨時的に設けられた制度であったところ、歴史の偶然によってたまたま大役を背負わされたことから、そこにかなりの無理が生じてきたのである。

女神の第二の悩みは、高らかにかかげた理想が、現実の厳しさの前にしだいに裏切られてきたこと

にある。この点を理解するには、まず自由貿易の理念、ガットに体現された国際貿易のあるべき姿とはいったい何であったかを深く見きわめることが必要である。世上とかく「自由貿易」といえば関税を引き下げ、数量制限を撤廃して、自由に貿易が行なわれることだと思われやすい。確かに自由貿易の理念の第一は、文字通り自由な取引き、自由な輸出入にあることは疑い得ないが、政治的理念としての「自由」が責任や義務の概念を伴うのと同じく、国際通商における「自由」の理想も以下第二章に述べる通り、無差別、平等の考え方や、公正な、フェアーな競争といった思想と裏腹をなしていることを忘れてはならないであろう。

他方、今日の「体制の危機」との関係では、戦後勇ましく発足したガット体制の理想が、各国の利害や事情によってねじまげられてきた、という「理想と現実のギャップ」に注目せざるを得ない。このような理想と現実のギャップのうち、もっともきわだったものは、自由貿易の理念に真向から対立する輸入数量制限が多くの国々によって維持されてきたことであるが、この他、第四章に列挙する色々な事象によって、すでに過去二〇余年の間、自由貿易の理念は白アリの侵食のようにむしばまれてきたのである。

ひるがえって、自由の女神の第三の悩みは何かと問えば「新しい時代の潮流」という答えがはね返ってくるであろう。

すなわち、世界の自由貿易の制度的枠組が、歴史的事情から先天的欠陥を持ち、それに加えて、ガットがかかげた理念すら現実とのギャップによって必ずしも遵守されず、このような事実がしだいしだいに自由貿易体制をむしばんできたことは確かだとしても、ここ数年の間に急激にガットの危機、自由貿易体制のゆらぎやきしみが問題とされるに至った背景には、近年、否、場合によっては一〇年以上も前から徐々に台頭してきた新しい時代の潮流が、七〇年代に入るにつれてせきを切ったように顕在化し、既存の貿易秩序に挑戦状を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com